

地域で学び、地域と共に歩む松本大学の今。

松本大学学報

sokyu 蒼穹

2017.9 Vol.128



活躍する松大スポーツ（詳しくはP.14・15をご覧ください。）

特集

いよいよ本腰を入れる 防災教育

P.02

- 「地域が求める人材育成を目指して」～APフォーラム開催される P.05
- 高校生に研究の魅力を伝える
～第10回「ひらめき☆ときめきサイエンス」実験教室を開催～ P.06
- 「おいでよ♪松大健康教室」の開催 P.08
- 「南極へGO!」ブースが大盛況
「まつもと広域ものづくりフェア」開催 P.08・13
- 「地球のステージMATSUMOTO」開催
～松本ユース平和ネットワークの学生がトークセッション～ P.09
- 「第18回『開かれた学校づくり』全国交流集会in松本」開催 P.13 ほか

いよいよ本腰を入れる防災教育

9月1日の防災の日を迎えた今月、テレビやラジオなどのメディアでは一斉に防災関連の話題が取りあげられました。

激甚災害が発生した時にどう行動するべきか。災害発生からしばらくは、地域の実情に沿って自分たちの身を自分たちで守ることが重要であり、それぞれの地区に応じた行動や対策が求められます。

いざという時に適切に行動できる“人づくり”が課題となっている状況を念頭に、松本大学では4年前から、日本防災士機構が認定する“防災士”を養成する講座を開講しています。地域住民を対象とした講座を設ける一方、学生向けには地域防災に関わる本格的な教育を導入し、より深く課題に取り組む体制を構築しています。今回は、本学で行っている防災に対する取り組みをいくつか御紹介します。

(松本大学 地域連携(COC)戦略会議議長 木村 晴壽)



2011年3月11日、三陸沖を震源とするマグニチュード9.0の大地震は、2万人近くの尊い命を奪い去った。写真は、東日本大震災からおよそ1カ月後の石巻市大街道南地区。

災害は忘れた頃にやってくる!

「災害は忘れた頃にやってくる!」の言葉どおり、普段の生活で災害を意識している人はほとんどいません。防災意識が多少なりとも深まるのは、残念ながら、大きな災害の直後に限られるのが現実です。それでも、災害が起こる度に、少し

ずつとはいえ、災害への意識は広がってきました。そんななか、私たちの災害意識を覚醒させたのは阪神淡路大震災と東日本大震災でした。特に東日本大震災は、戦後の激甚災害としては死者・行方不明者数が群を抜いていたばかりか、ほぼ

アルタイムで津波に流される町の映像が流れたこともあり、国民の多くに強烈な印象を残しました。災害への関心を一挙に高める役割を果たしたのです。

重要な地域課題、災害対策の“人づくり”

東日本大震災の発生直後から本学は、宮城県石巻市の大街道小学校を拠点に災害支援活動が続け、震災直後に入学した児童が小学校を卒業して中学生になるのを機会にひと区切りをつけることにしました。校舎や民家の瓦礫撤去という力仕事に始まって、徐々に教育活動への支援へと移行しま

した。支援の核となったのは、本学のスクールカウンセラーによる定期的なカウンセリングと並行して実施した児童の学習支援です。落ち着いた勉強に取り組みにくい仮設住宅暮らしの子供たちに配慮して、毎週2回の放課後学習支援を6年間続けました。小学校行事への参加など交流は続いている

もの、目下、これまでの6年にわたる支援活動の意味・成果を整理している最中です。活動を通じて目の当たりにした災害の現実には様々ありますが、それらを詳細に検討することで我々なりの知見ができてつあるように思われます。ごく簡単にいえば、その第一は、激甚災害が発生したときの原則は“自助”に尽きるということです。発生からしばらくは救助を含めた手助けはないと思わなければなりません。第二に、災害対策は極めて地域的な課題だということも肝に銘じておくべきでしょう。地震であれ水害であれ、被害状況は地区によってまったく異なるし、災害発生後にはそれぞれの地区の実情に応じた行動や対策がとられなければ、公的機関やボランティアを含めた支援の効果は半減してしまいます。つまり、地域の実情に沿って自分たちの身を自分たちで守ることが基本ですから、次なる課題はそのように行動できる“人づくり”ということになります。日本防災士機構が認定する“防災士”は、“助けられる人から助ける人へ”をスローガンに、平常時・災害時を問わず各地域の防災リーダーたるに相応しい知識と技術を持った人材であり、私たちの問題意識からすれば、まさに胸に落ちる制度なのです。



本学の石巻市立大街道小学校での学習支援活動

防災士養成の授業科目を導入

災害について幅広い知識を持つ人材の養成が重要な地域課題に浮上しているいま、地域社会に視点を据えた教育・研究を標榜する本学としては、地域住民対象の防災士養成講座を継続する一方、地域防災に関わる教育を本格的に導入すべき時期にさしかかっています。具体的には、防災士資格にもつながる地域防災関連の授業を正規科目として配置することが求められているのです。



平成29年度後期から開講する防災関連の授業は、以上のような本学の考え方をそのまま反映させた内容になっています。1年次後期に「防災総論」(2単位)、2年次前期に「防災各論」(2単位)・「地域の防災」(2単位)を

履修し、これら3科目の単位を取得すれば防災士認定試験の受験資格が得られるように設計されています。一般住民対象の養成講座と比べれば十分な時間をかけられるため、防災士にとって必要な知識・技術に加え、地域づくりとの関係、あるいは災害と企業経営の関係など、本学ならではの特色を持った内容に仕立てました。被災地支援に関わってきた本学の専任教授陣と行政・企業サイドからの講師陣が総力を結集して教育にあたるので、高等教育として十分な水準の授業になることはもちろん、今後は年度を経るごとに内容をさらに拡充する予定です。

防災士のフォローアップに向けて 先進事例の松山市を視察

本学が実施する防災士の養成講座は本年度で4年目になり、主に県内在住の方々を対象にこれまで約250名の地域住民が、本学での講座受講を通じて防災士に認定されています。しかしそれにもかかわらず本学は、それら防災士の皆さんが具体的にどのような能力を活かして活動しているのか、どのような問題に直面しているのか、という状況を把握できておらず、ともするとアフターケア欠如のきらいがあります。しかも、防災に係わる知識・技術は、定期的に繰り返される学習と訓練によってこそ現場で生きるものであり、災害を経るごとに防災に関する知識には新たな知見が加わるため、防災士資格を得た後のフォローアップやブラッシュアップの場がどうしても必要になります。

このような状況を踏まえれば、資格取得後のアフターケアは、養成講座を担当してきた本学の責務でもあり、一刻も早くそのための組織を立ち上げて実行に移さなければならないところです。そのための一助とすべく、防災士養成に自治体が大きく関わっている愛媛県松山市の事情を調査しています。防災士養成講座に要する費用全額を自治体が負担することを通じ松山市は、市民が防災士資格を取得することを奨励しており、これまでに防災士となった市民の数は4,000名に近づいています。養成講座自体は松山市にある愛媛大学の防災情報研究センターに委託して実施されていますが、特徴的なのは、継続的に実施されているフォローアップ活動



松山市にて、消防局員から説明を受ける教職員

を、愛媛大学内で組織された学生による自主防災組織が請け負っている点です。フォローアップ活動に携わる学生たちには、防災情報研究センターを通じて市から報酬も支払われており、自治体・市民・大学が一丸となって防災問題と取り組んでいる姿が垣間見えます。

フォローアップ組織の立ち上げ・防災士関連授業のスタート・防災士養成研修講座の継続など、さらに発展させるべき課題を抱える本学が松山市の実例から学ぶ点は多岐にわたっており、松本市の実情に沿った的確な仕組構築に向け、参考になる先進事例です。

「保育園給食食材の放射性物質に関する調査」

健康栄養学科 教授 杉山 英男

COC事業「地(知)の拠点整備事業」の一環として、杉山ゼミでは、松本市立保育園の給食食材の放射性物質調査を平成26年9月より実施しています。この調査では、食材に含まれる放射性物質の存在量を調べて、状況に応じては摂取量や曝露量の評価を行います。科学的なデータをもとに、保育園児や保護者、給食関係者、業者等に対する食の安全・安心確保について寄与し、地域貢献することを目的としています。調査は、松本市内のNPO法人日本チェルノブイリ連帯基金(JCF)との連携、松本市こども部の協力を受けて、ゼミ4年生全員が主体となり、食材の前処理や放射線測定、解析などを行っています。これらの測定結果は、調査当日に松本市に報告し衛生行政のための基礎資料として用いられます。また、適時、松本大学のホームページで結果を公表しています。平成29年7月までに282食材を調べた結果、国の基準値(放射性セシウムとして100 Bq/kg)を超える放射性セシウムは検出されておらず、基準内であることがゼミ生らの地道な活動で示されました。



放射能測定装置(Nal(Tl)型)に食材入りの容器をセットし計測する

健康栄養学科では、災害食の研究に取り組んでいます。

被災した食物アレルギー患者が、安心して食事できるように ～パッククッキングの活用～

健康栄養学科 専任講師 沖嶋 直子

東日本大震災ではその被害が広範囲にわたり、ガスや電気が使えない避難所では温かい食事が得られにくく、寒い中避難された多くの方々はつらい思いをされました。さらに、配給される食べ物にアレルギーが含まれる事も少なくなかったため、食物アレルギー児の保護者が子どもの食べられる物を探して避難所を何カ所も回ったり、誤食でアレルギーを発症したりと苦労された事が調査報告から明らかとなっています。

近年、ライフラインが寸断されても、水、ポリ袋(※)、鍋、ザル、カセットコンロがあれば調理できるパッククッキングが活用されつつあります。ポリ袋に材料を入れて口を縛り、材料に火が通るまでザルを敷いた鍋の中で湯せんします。湯せんの湯は繰り返し使用でき、一つの鍋で複数の料理を一度に調理できます。災害直後に配給される食べ物は温かいものが少ないですが、パック

クッキングでは温かいものが食べられます。

沖嶋ゼミナールでは、パッククッキングの「一つの鍋で複数の料理が一度に調理できる」特性を、除去食品が患者により違う食物アレルギー患者の災害支援に活用しようと研究しています。1つ目のテーマはパッククッキングで特定原材料(卵、乳、小麦、落花生、そば、えび、かに)除去メニューを考案する事、2つ目のテーマはアレルギーが湯せん調理により他のパックへ移行しないか実験的に検証する事です。

卒業研究をする4年生とともに様々な工夫をして、特定原材料除去パック食メニューを考案、調理しました。パンが配られると小麦アレルギーの人は食べられませんが、米粉と大豆粉で蒸しパンを作れば、小麦アレルギーの人でも食べられます。避難生活が落ち着けば、おやつも欲しくなります。皮をむいて薄く切ったさつまいもに糖と豆乳ホ

イップを加えて柔らかくなるまで湯せんし、袋の上からもんでつぶして木の葉型にすればスイートポテトの出来上がり。もんでつぶして形を整えるのは子どもにもでき、避難生活で楽しみの少ない子どもも楽しくおやつを作って食べる事ができます。

湯せん調理によるアレルギーの移行については、20種類のパック食を検査した結果、乳製品が1種類のパック食から検出され、湯せんして移行する可能性は低い事が分かりました。そば、落花生もそれぞれ1種類のパック食から検出されましたが、特定原材料を含むほうのパックにもそばや落花生は使用していなかったため、材料に元々混入していた可能性が考えられました。

今後はこの研究成果を基に、有事の際には食物アレルギー患者やその家族のサポートが出来る体制を整えたいと思っています。

〈沖嶋ゼミナール メニューの一例〉



湯せん加熱調理した「米粉・大豆粉蒸しパン」



さつまいもに豆乳ホイップ、砂糖を加えて湯せんし、ポリ袋の上からもんでつぶして成型した「スイートポテト」



無洗米にケチャップ、特定原材料を含まないランチョンミート、コーン、玉ねぎを加えて湯せん調理した「ケチャップライス」



じゃがいも、たまねぎ、ツナ缶を使って湯せん過熱調理した「ツナじゃがもち」

【※注】：パッククッキングでは、食品用ポリ袋の使用が推奨されています。それ以外の素材では、加熱により袋が溶けて破れる恐れがあるので使用しないで下さい。

災害時要配慮者の備蓄チェックリストの作成

健康栄養学科 専任講師 藤岡 由美子

災害時要配慮者とは、障がい者、高齢者、妊産婦、乳幼児、特定疾患患者など避難において特に配慮を要する方々のことを言います。藤岡研究室では糖尿病と炎症性腸疾

患の患者交流会を毎年開催していますが、「災害時の備えについて教えて頂きたい」とのご要望をいただいたことをきっかけに、食事に配慮が必要な方々の自助(備蓄)を支援する活動を始めました。

災害時の備蓄(水や熱源を含む)は、最低でも3日分、できれば1週間分を確保することが推奨されています。農林水産省の「緊急時に備えた家庭用食料品備蓄ガイド」には、食料品や調理器具のリストが掲載されていますが、要配慮者については「別途準備する」としか記載されていません。そこで、研

究室では各病態の食事療法に適応した備蓄チェックリストを作成することにしました。

備蓄の長期保存による賞味期限切れや、普段の食事と異なり喫食者の口に合わないという問題については、日常の「買い置き」を備蓄と考え、消費する度に買い足して常に新しいものを補充する「ローリングストック」が病院等で実施されています。この方法を用いた備蓄を患者会で展示したり、オーダーメイドのチェックリストを配布したりして、災害時に要配慮者が普段の食事が続けられるように支援することを目指しています。



「地域が求める人材育成を目指して」 ～APフォーラム開催される～

松商短期大学部長 糸井 重夫



大学教育再生加速プログラム

松本大学松商短期大学部(以下、本学)では、平成28年度、文部科学省が実施する「大学教育再生加速プログラム(AP)」(高大接続改革推進事業)に採択されました。その取り組みの一環として去る7月29日、本学を会場に第1回APフォーラムが開催され、全国から大学・企業・高校の関係者が集まり、わが国の大学改革・教育改革について議論しました。

当日は、基調講演として、「近年の高等教育政策と大学教育再生加速プログラム(AP)」をテーマに、文部科学省大学改革推進室の河本達毅氏が講演されました。その後、APのテーマV「卒業時における質保証の取組の強化」の幹事校である日本福祉大学の齋藤真左樹氏の挨拶があり、事例報告として山梨学院短期大学と本学の取り組みが報告されました。さらに、これらの講演や



糸井重夫大学部長による事例報告

報告を受けて行われたパネルディスカッションでは、コーディネーターである日本福祉大学の中村信次氏を中心に活発な議論が展開されました。

これからの高等教育においては、従来の知識を重視した教育を尊重しつつ、学生の技術と能力(コンピテンス)をどのように高めていくのかが重要になってきています。そこで、現在、「アクティブ・ラーニング」などを通して個々の学生の能力(コンピテンス)を高め、その成果を「ルーブリック」(評価基準を明示した表)により評価する手法や、労働市場での“就業力”の比較可能性



パネルディスカッションの様子

を高めるために、卒業時に「ディプロマ・サプリメント」(学位に関する個人別の説明文書)を発行する取り組みが注目されています。今回のAPフォーラムでは、地域社会と連携した評価手法の開発や「ディプロマ・サプリメント」の開発と普及について議論しました。

現在、わが国の高等教育は、欧米の大学改革・教育改革に影響されて大きく変わろうとしています。APに選定された77の高等教育機関は、グローバル化した社会で求められる教育手法の開発や、その成果を社会に提示する手法の開発を精力的に進めています。本学もその一員として、本学の取り組みの成果やわが国の高等教育改革の状況についてAPフォーラムなどの場で情報発信していきますので、今後開催される本学のAPフォーラムへの多くの方々の参加を期待しています。

「デパートゆにっと」で実践学習の成果発表 ～松本市制施行110周年記念企画で写真展も～

観光ホスピタリティ学科 教授 大野 整

長野県商業教育研究会と本学が共催する恒例の「第5回全国高校生合同販売デパートゆにっと」が、8月18日から3日間の日程で開催されました。今年は会場を長野市から松本市の井上百貨店本店へ変更し、7階催事場の広いスペースを活用できたことで、販売だけでなくイベントやワークショップも取り入れた多彩な催しとなりました。県内11校、県外3校の高校生とともに、本学からは「支援会ゆにまる」の学生16名

が参加しました。

本学の学生は販売のサポートのほかに、松本市制施行110周年記念として「松本市の商業文化展」を企画しました。明治から現代に至る市内商店街の約100枚の写真を展示し、松本市民の街づくりへの関心を高めようとする新たな試みとして注目されました。当日、学生はあらかじめ松本市の産業や商業の歴史を予習して臨みましたが、特に年配の方々からは写真を見ながら懐かし

いお話をお聞かせる場面も多く、写真を通して地域の方々との触れ合いを持つ良い機会となりました。今回の企画は好評で、「昔の自分の店が写っていて嬉しい、写真展を更に各地で実施して欲しい、写真集にして欲しい、PRをもっと欲しい」など学生の励みとなる多くの意見や要望も寄せられました。



多くの人で賑わった会場の様子



また高校生による販売の内容も年々充実し、高校生が開発した地元の素材を活かした商品が160点以上並びました。食品以外の商品も扱われたり、飯田OIDE長姫高校は水引細工のワークショップを開催するなどの試みもあり、特に最終日は家族連れも多く訪れるなど盛況な販売会となりました。

教育学部 一期生有志によるサマーコンサートを開催

学校教育学科 専任講師
安藤 江里

7月25日、松本大学教育学部多目的室にて、教育学部一期生有志と教職員によるサマーコンサートを開催しました。入学して4カ月、初めてピアノに触れた学生もこつこつ練習し、独奏や連弾でその成果を堂々と発表することができました。また、様々な楽器を持ち寄ってアレンジした器楽アンサンブル曲や「ふるさと」のアカペラなど、限られた時間の中での練習でしたが、仲間と演奏できる喜びを味わうことができました。最後はゆずの「夏色」で想像以上に盛り上がり、日頃、授業の中だけではなかなか見えてこない一生懸命演奏に打ち込む学生の姿や生き生きとした表情に、聴

いてくださった皆さんも一緒に感動を味わえたひと時でした。今回、勇気をもって出演した学生は「緊張したけれど、出てよかった」、また、急遽依頼された学生も「はじめは乗り気ではなかったが楽しかった」など、前向きな感想を届けてくれました。今回はごく一部の学生でしたが、これを機により多くの学生がそれぞれでできることで参加していけるようなコンサートを今後も開催していきたいと思えます。

今回、初の企画でしたが、コンサートの司会や会場準備など裏方スタッフとして協力してくれた学生もいました。みんなの協力で、温かいまなざしで応援して下さった先生方のおかげで無事、コンサートを終えることができました。ありがとうございました。表現すること、それを受け止め高め合うこと、そして少しでも多くの人と共感・共鳴することの素晴らしさをこれからも重ねていきたいと思えます。次回をお楽しみに。

た先生方のおかげで無事、コンサートを終えることができました。ありがとうございました。表現すること、それを受け止め高め合うこと、そして少しでも多くの人と共感・共鳴することの素晴らしさをこれからも重ねていきたいと思えます。次回をお楽しみに。



SUMMER CONCERT

マツダイコンサートVOL.1 プログラム

1. ミッキーマウスマーチ (ピアノ連弾)
2. 聖者の行進 (ピアノ連弾)
3. メリーさんの羊&ロンドン橋 (ピアノ独奏)
4. よろこびのうた (ピアノ連弾)
5. ビーマーチ (ピアノ独奏)
6. いのちの名前&ロング ロング アゴー (アンサンブル)
7. めぐりあい (ピアノ独奏)
8. ふるさと (アカペラ)
9. お楽しみ
10. 風笛 (オーボエ独奏)
11. 子供の領分より
グロドゥス・アド・パルナッスム博士 (ピアノ独奏)
12. 翼をください (アンサンブル)
13. 夏色 (弾き語り)



高校生に研究の魅力を伝える

～第10回「ひらめき☆ときめきサイエンス」実験教室を開催～

大学院健康科学研究科 教授 高木 勝広

8月26日、「自分の遺伝子型を調べてみよう～2017～」実験教室を本学6号館生理学実験室において開催しました。

この実験教室は、独立行政法人日本学術振興会の「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI」事業の一環で、大学や研究機関で取り組んでいる科学研究事業(科研費)による研究を、小中学生や高校生に分かりやすく発信する取り組みとして始まったものです。本学では今回で10回目の開催となり、当日は8名の高校生が参加してくれました。

実験は、「お酒に強いのか、弱いのか」「太りやすいかどうか」「短距離型筋肉か長距離型筋肉か」に関わる遺伝子を一つ選んで、自身の遺伝子型をタイピングするという内容です。

実験では初めに各自の唾液からDNAを抽出しました。抽出液にアルコールを加え

ると白い糸くずのようなものが突然現れました。「これが皆さんのDNAです」と紹介すると、参加者は目を丸くしたり、大きくなるはずいたり大いに盛り上がりました。次に、それぞれの遺伝子を増幅させるために、サーマルサイク

ラーという機械でPCR反応(ポリメラーゼ連鎖反応)を行いました。そして午後には、PCR反応産物をアガロース電気泳動にかけて、自身の遺伝子型を判定しました。

参加者たちの多くは初めは緊張しているようでしたが、ティーチングアシスタントとして学部生たちが参加者の傍らにいたので、安心した様子で最後まで和やかな雰囲気で行うことができました。



最後に参加者の声の一部を紹介します。「実際に自分のDNAを見るのも、様々な道具を扱うのも初めてで、とても新鮮でした。」「学校でPCR法について学習していて、実際に実験が出来て、とても楽しかったし、勉強になりました。」

これからも高校生たちの夢を広げる本プログラムを推し進めていきたいと思えます。

松本電気館(上土町)の再生・活用を目指すプロジェクト

観光ホスピタリティ学科 教授 白戸 洋

松本城にほど近い上土町に残る旧「上土シネマ」は、1917(大正6)年ごろ「松本電気館」として、市内の有志が開館のために資金を募ってできた映画館です。松本城総堀東門近くの土を盛り上げた「揚土」から地名がつけられた上土町は、多くの芝居小屋や遊技場が開かれていましたが、時代の流れに沿って大正期から昭和期にかけて営業形態を変化させ、映画館を開業し、「娯楽の街上土」「映画の街上土」として市民に親しまれるようになりました。その中核となったのが日本で最初の映画館として浅草に開か



1930年(昭和初期)のころの松本電気館

れた「電気館」にちなんで開館し、今年ちょうど竣工100年を迎えた「松本電気館」です。当時は市民はもとより松本製糸場や渚の松本精錬所の女工、松本五十

連隊の兵士などが集まり、休日に映画を楽しんだと言われます。「松本電気館」は1967年に現在の建物に改築されましたが、開館当時の西洋の建築様式を取り入れた重厚なファザード(建物の正面部分)が残されています。

観光ホスピタリティ学科の白戸、畑井、向井の3ゼミは、これまで10年にわたり上土商店街のまちづくりに携わってきましたが、現在この「松本電気館」を街づくりの拠点として再生・活用するプロジェクトに取り組んでいます。建築物として価値のあるファザードの保存を軸に、上土のみならず松本市の中心市街地の新しい拠点として「松本電気館」を再生・活用することは、松本のまちづくりや観光の課題である市内の回遊性を高める絶好の機会でもあります。これまで地元の上土町の方々とともに学習会



地域住民の方との学習会

を重ねてきましたが、その中から、①市街地の着地型観光の拠点、②「娯楽の街上土」の拠点、③松本の商業文化を再生する拠点として「松本電気館」を位置づけ、今後「松本電気館の再生に関する検討ビジョン」の策定に学生が参画する予定です。また映画館を活用したまちづくりについてのシンポジウムの開催や映画館に残る古い映画ポスター展なども企画しています。松商学園の前身である「私立戊戌学会」の発祥の地として、松本大学にとってもゆかりの地「上土町」から新しい松本のまちづくりが始まろうとしています。

松本大学とひまわり畑

観光ホスピタリティ学科 准教授 中澤 朋代

「花は咲かせるから大学でPRをお願いできないか」。長年にわたりお付き合いを続けていたJA新村青年部からこの提案をいただいたのが9年前です。それから毎年、学生・青年部・教員が世代交代しながら続けてきた「新村のひまわり」は、近年、夏の風物詩として地域に定着した実感が持てるようになりました。SNSでの拡散もあり、見どころの紹介や、条件の良い日に見ていただくこと、駐車時の交通ルールを守ること、など広がりを見せ、情報社会の効果を感じています。

この夏はJR東日本による信州グスティネーションキャンペーンでした。観光業界が協力して信州をPRする期間にちょうど見事な咲き具合。さすがプロ農家の力量です。学生はこの資源を活かす地域の広告代理店としての役割を担っています。試験明けすぐに控える「ひまわり祭り」の準備に、初めての企画、実行計画と組織作り、保育園との交流、企業・関連機関訪問、マスコミ対応、と懸命に役割を果たそうという姿は、見ていて清々しいものがあります。来年は10周年、皆さまに感謝し、小さくとも新たな発想を生み出したいと思います。



乗鞍岳とひまわり



テレビ取材での一コマ

「おいでよ♪ 松大健康教室」の開催

健康栄養学科 教授 廣田 直子

7月15日、本学において「おいでよ♪ 松大健康教室」を開催しました。この教室は、松本大学健康栄養学科3年生の「栄養教育実習」の学修成果発表の場であるとともに、COC+事業の一環として地域の皆様の健康づくりにつながるようという願いをもって実施しているものです。

91名の学生が14の班に分かれ、幼児・学童・大学生・成人(メタボリックシンドローム・高血糖の予防、適正飲酒)、高齢者の低栄養予防という7つのテーマに沿って2カ月前から準備に取り掛かり、当日を迎えました。事前には何度もリハーサルを重

ね、学生同士で意見を交換し合い、より良い発表ができるよう努めてきました。当日、学内外からの参加者は80名となり、昨年よりも多くの方々が足を運んでくださいました。

教育手法としては、寸劇やペープサート(紙人形劇)、参加型講義などがあり、試食を提供したりクイズを出したりと、健康や栄養について関心をもっていただけるよう、また楽しんでいただけるようにと工夫をこらしつつ発表を行いました。



学生たちが考えた“もぐもぐ戦隊タベルンジャー”や“高血糖予防侍(さむらい)”、“食べ残しは許さへんでえ”と伝える給食のおばちゃんなど、キャラクターが登場すると大きな声援が上がり、会場は盛り上がりました。学生たちは栄養教育実践のやりがいと難しさを感じたことと思います。

参加者アンケートでは、学生の頑張りに刺激を受け「今日から実践してみる」という意見が多くあり、地域の方々に学生たちから「健康づくりへのヒント」というプレゼントが届いたとすれば、うれしいことです。

この間、お世話になりました多くの皆様に感謝致します。



「南極へGO!」ブースが大盛況 ～まつもと広域ものづくりフェアで、教育学部出展～

学校教育学科 准教授 澤柿 教淳

松本地域の子どもたちにもものづくりの魅力を伝える「2017まつもと広域ものづくりフェア」が7月15日・16日に開催されました。たくさんの方々が来場される中、教育学部では「南極へGO!」というブースを設けました。

まず、大画面シアターで「極寒の南極大陸で活動する観測隊員」や「地球の影が映る地平線」、「ペンギンたちの愛らしい行動」など迫力の映像を視聴し、気持ちが南極に飛んだところで次に、実際に観測隊員が着用した防寒具を身に付けたり、南極の氷に直接

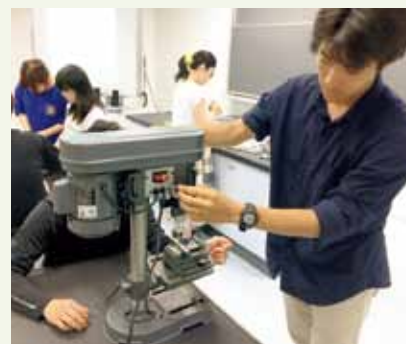


スタッフによるプレゼンテーション

触れたりする体験をします。南極の氷には1～3万年前の空気が閉じ込められていて、水を注ぐとパチパチとはじける音がします。出てきたのは1～3万年前の空気です。

そしてメインの活動、ペンギン歩行模型の製作です。実験台の上に並ぶ部品を一つ一つ丁寧に組み立てていくと、まるで本物のペンギンが歩いているような2足歩行の模型が完成します。途中、専用のルール上で動きを確かめたり、調整をしたりしているうちに自分だけの個性的なペンギンになっていくのもおもしろいところです。

この日に向けて多くの教育学部生がスタッフとして準備に取り組みました。放課後になると自主的に理科室に集まって100を超える細かな部品を手作業で作りました。専用の工具でパイプを切り、電動ドリルで穴を開け、汚れを磨いて拭き取る…。根気のいる地味な作業でしたが、理科室はいつ



当日に向けて、細かな部品を手作り

も笑顔でいっぱいでした。準備最終日には、骨組みの部材にボディも取り付けようというアイデアも投入され、みんなで盛り上がりました。子どもたちの喜ぶ顔や没頭する姿が思い浮かぶたびに、それがスタッフ一同の原動力となっていきました。

イベント当日、予想を超える数の参加がありました。緊張の中、シアタースタッフが明るくプレゼンテーションを行ったり、模型スタッフが一人一人のそばでサポートしたりのおかげで、参加した皆さんは安心・安全に活動することができました。ものづくりの魅力が一人でも多くの子どもたちに伝わっていたらうれしいです。

まつもと広域ものづくりフェアでは、この他にも本学から6つのコーナーを設けました。詳しくはP.13をご覧ください。

「地球のステージMATSUMOTO」開催

～松本ユース平和ネットワークの学生がトークセッション 世界を考える時間に～

観光ホスピタリティ学科 学科長・教授 尻無浜 博幸

「地球のステージMATSUMOTO」を企画、運営することになって3年目となった今年は、7月9日に本学にて開催の運びとなりました。「地球のステージ」とは、心療内科医の桑山紀彦先生が世界の紛争、災害地域をめぐる、そこで出会った人々の姿をオリジナルの歌とハイビジョン映像で送るという映像と音楽のライブステージで、小さな子どもでも理解できるよう工夫されています。

「地球のステージMATSUMOTO」は毎回そのライブステージを第1部とし、第2部では桑山先生と学生とのトークセッションで構成されています。先生は、毎回ステージ上で来場者にメッセージを伝えることはもちろんのこと、企画を運営している我々にも直接に接し、この企画に携わる意義を説いてくださいます。

第2部のトークセッションは、第1回はスリランカやネパールで孤児や地震の支援を体験した学生と、第2回は、東日本大震災での災害支援に長きにわたり関わった学生と、そして第3回となる今年は、「松本ユース平和ネットワーク」で活動する学生3人とのものとなりました。

「松本ユース平和ネットワーク」は、松本市平和推進課と松本大学、信州大学の学

生で構成されており、昨年5月に発足しました。“若者による平和を創る街=松本”をキャッチフレーズに、活動しています。トークセッションでは若者が平和を考える視点についてや、平和を伝える方法についてなど、学生が活動を通じて感じた課題を桑山先生に忌憚なくぶつけていました。また、長崎大学の学生との交流から得た、現在世界中に存在する核兵器の数をイメージで表現したパフォーマンスでは、改めて核兵器の数の多さにびっくりさせられることを桑山先生に評価してもらい、学生は自信になったようです。

本企画、運営にもう少し関心をもってくれる人が増えたらと思う一方、最後の振り返りの時間に、一人の学生が「もう少し世界を考えるようにしたい」とゆっくり唇を噛み締めるような発言を聞いて、「地球のステージMATSUMOTO」を企画、運営するこの時間は、毎年一人の学生の思いに灯火を付ける時間だと思いました。



中国（嶺南師範学院）からの交換留学生、スピーチコンテストで優勝・準優勝の快挙！

松商短期大学部 准教授 中村 純子

去る7月15日、松本市中央公民館で開かれた「平和・国際交流に関わる留学生スピーチコンテスト」において、本学の留学生が見事、優勝・準優勝を飾りました。このスピーチ大会は今年で7回目になります。本年度のスピーカーは信州大学・松本大学・丸の内ビジネス専門学校等に在籍する留学生の応募者の中から、原稿審査で16名が選ばれました。本学からは6名が応募し、3名が選ばれてスピーチ大会に臨みました。原稿を見ずに、外国語で5分間のスピーチを行うことは容易ではありません。スピーカーに選ばれてから3名は何度も何度も練習を繰り返し、本番に臨みました。

優勝したジョーレイシさんのスピーチの題は「我が家の日本嫌いのお父さん」。日中戦争の影響で日本が大嫌いだった父親が、日本が大好きな娘のジョーさんと大喧嘩を繰り

返ししながら、次第に日本が好きになっていく過程を、ユーモアたっぷりにスピーチして会場を沸かせました。最後に彼女は「両国の溝は少しずつ埋まっている」と締めくくりました。

準優勝をしたティ・ギョクテイさんの題は「花と笑顔」です。彼女は、大学へ通う道に花が溢れているのは、ボランティアのお蔭だと知り驚いたこと、そして、その花よりもっと美しい人々の笑顔が彼女の固い表情を笑顔にしてくれたことを流暢な日本語で語りました。最後に「人は美しいものを破壊したいとは思わない。だから、平和のためにもっとお花と笑顔を咲かせよう」と呼びかけました。

3人目のスピーカー、ヒョウ・カゴウさんのスピーチも素晴らしいものでした。「古着が世界を救う!」と題して、日本の古着屋の多さとファッション性に驚いたこと、そして、



左:ティ・ギョクテイさん 中央:ジョーレイシさん 右:ヒョウ・カゴウさん

日本の服の再利用率の高いことの素晴らしさを、環境問題の視点から熱く語りました。最後には「服を一着リサイクルしても世界は変わらない」と思っている聴衆に、ひとつひとつの行為の積み重ねの大切さを訴えてスピーチを終えました。

他の13名のスピーチも素晴らしく、様々な視点・価値観・文化などを感じた2時間でした。まさに多様性のもたらす豊かな時間というのは、こういうことなのだと思感しました。

本学の3名のスピーチは松本大学のホームページ、英語版に掲載されています。視聴頂ければ幸いです。

学校の枠を越えた新たな学び

「支援会ゆにまる」に属する学生が、毎日のように研究室に集まっています。ゼミでもサークルでもないこのグループは、本学で行う高校生の学習の場、「マーケティング塾」のサポートを目的として集まったメンバーです。本学の高大連携教育は、2005年に穂高商業高校と連携することから始まりました。その後多くの大学で高大連携教育が広がりましたが、高校生と大学生が地域を教材として共に学びながら切磋琢磨していく連携教育が推進された大学は、全国的にも少ないと思います。「マーケティング塾」は月1回のペースで行われ、商業高校生を中心に70名前後の高校生が学んでいます。そこには大学生や地元の企業の方々もサポートに入ります。サポートを受けながら学び考え、その検証の場として行われる催しが、毎年2月と8月に行なわれる「デパートゆにと」です。

「支援会ゆにまる」は学部を超えた有志の集まりです。参加は強制されません。彼らは高校生の学びをサポートするという志のもとで、自らがイベントや学習会を企画し商品開発も行います。学びたいという欲求をどのような形にしていくか。集まってくる学生の知恵に驚かされ、教えられる毎日です。

私は高校の教員を35年間勤めてきました。その間本学との高大

連携教育にも携わり、学びとは何かを模索してきました。私の専門は商業教育ですが、時代への対応を常に問われる実学の分野に触れることで、与えられた学びだけでは生きる力は培われないと考えるようになりました。教育の多くの場面で、目的と手段が混同されているといわれます。そのよじれの修復が新たな学びを考えるポイントだと思います。

本学の高大連携教育は学校の枠を超えた新たな学びの、実証の場です。学びの欲求は人として誰もが持ち合わせているものです。学校の枠を超え、年齢を超え、立場を超えて、学びたいことを自らが見つけて動き出す。そのような学びの本来の姿をこれからも探してみたいと思います。

明治大学商学部卒。長野県高等学校教諭、長野県教育委員会事務局指導主事、長野県高等学校校長を経て2015年より現職。商学士。
【専門分野】商業教育 【研究課題】産業教育 高大連携教育



》「学びと共に絆を深める」～第1回abn5時間リレーマラソンで運動指導そして完走～

スポーツ健康学科 准教授 山本 薫

キャンパスを飛び出し
地域で学ぶ!

out campus study

アウトキャンパス・スタディ

5月20日、まさに蒼穹が広がるもと、第1回abn5時間リレーマラソンがやまびこドームで開催され、ゼミ生含む10人の学生が当日スタッフ・走者として1日参加してきました。

賞品もできるとあり学生は張り切っていました。それだけでは物足りないと思っていたところに、スタート前の準備運動指導をする機会をいただきました。初めて開催されるイベントなので当日は何人くらい参



提供:朝日新聞社

加者がいるのか、子どもから大人まで幅広い世代が参加する中でどのように指導すればいいかなど、学生は考えれば考えるほど不安になっていきます。そこでゼミ生5人で、指導内容をどのように構成するか、何度も話し合いを行いました。内容構成が固まってきたところで、次は実際の演技や指導法の練習です。もちろん私からもアドバイスはしますが、イベント自体が第1回なので、参考になるイメージはありません。しかし前例がないことがかえって幸いし、学生が自由に指導内容を考えることができたと思います。

そうこうしているうちに当日を迎えました。必ずハプニングは付きもので、指導開始直前になって「テレビ中継が押しているので10分くらい延長して行って欲しい」との要請がきました。後ろにいるだけの私が

焦りましたが、学生たちは何とか役割をこなしてくれました。もっと上手く出来たはずなのに、といろいろ反省して悔しがる学生の姿もありましたが、準備運動終了後は達成感と安堵感に包まれました。

すぐにリレーマラソンのスタート時刻となり、5時間の熱い戦いが始まりました。途中から優勝を目指して学生全員の気持ちが一つにまとまっていくのを感じました。結果は4位。あと一步のところまで入賞賞品は逃しましたが、「残念だったね、また来年走りたいね」という言葉が自然と出ていました。

不安と緊張、安堵、そして必死さの後に悔しさと充実感。たった1日で様々な感情の起伏を全員で味わった学生たちの絆は一気に深まったと感じています。その後の打ち上げで学生達が思い切りはじけていたのは言うまでもありません。

地域の健康づくりを支援する 地域健康支援ステーション



地域健康支援ステーションでは、地域からの依頼を受けて健康づくりの支援やメニュー提案など実践的な活動を行っています。最近の活動をご紹介します。

栄養面での健康づくり支援活動

管理栄養士スタッフ 飯澤 裕美

真々部地区寿会で 楽しくおやつを作って交流会

6月28日、安曇野市豊科真々部地区の高齢者が交流する寿会から料理教室での指導の依頼を受け、真々部公民館に伺いました。はじめに参加者全員で「凍み豆腐の白玉団子」と「そばガレット」の調理実習を行い、試食をしながら、高齢期の日々の食生活のポイントのお話をしました。



「凍み豆腐の白玉団子」は材料をよく混ぜ合わせ、団子状に丸めて沸騰したお湯で茹でてきな粉をかけていただくもので、「柔らかくて年配の私たちにも食べやすいね」と好評でした。「そばガレット」は材料

をよく混ぜ合わせて粘り気のある生地を作り、クッキングシートを敷いたフライパンに生地を丸くのばして焼いた後、シートごと裏返して裏面も焼き、フルーツやクリームを包んでいただきます。「裏返すとシートごとひっくり返すので失敗しないね」など話が盛り上がりました。簡単な調理で皆が夢中になって取り組む姿が見られ、主催者側からも喜んでいただけました。

ものづくりフェアで パッキング

7月15日、松本大学を会場に開催された「ものづくりフェア」において、長野県栄養士会中信支部との共催で「カレーライスを作ろう～ポリ袋でクッキング～」コーナーを設けました。栄養士会中信支部が災害非常時の食支援対策として作成した料理集の中から、「カレー」「ごはん」「チーズオムレツ」の3種類を栄養士会の管理栄養士に指導していただき、本学健康栄養学科の学生の補助の

もと、18組の親子がパッキングに挑戦しました。切った食材と調味料をポリ袋の中に入れて袋ごと揉みこむ作業には子供が大喜びしていました。よく揉みこんだ後それぞれの袋を一つの大鍋に入れて茹で、皿に盛り付け、家族で試食していただきました。待ち時間を利用して健康栄養学科沖嶋直子専任講師から災害非常時の対応やパッキングのアレルギー除去食への応用についてお話していただきました。参加者からは「材料を袋に入れていただけなのにおいしい料理ができた」「1つの鍋で同時に複数の料理ができ、アウトドアクッキングや家でもやってみよう」などの感想をいただきました。



運動面での健康づくり支援活動

健康運動指導士スタッフ 赤津 恵子

奈良井公民館で 介護予防のための運動を実践

7月1日、塩尻市奈良井公民館において、地域の皆様を対象に認知症、寝たきり、転倒予防等に効果的な運動を、スポーツ健康学科の学生3名とともに指導しました。参加者はおおよそ80名、全員が75歳以上で要介護にはなりたくないとおっしゃる方ばかりでした。最初になぜ要介護になるのかを話し、その後、毎日継続してほしい簡単なロコモ予防の運動を実践しました。



また、学生も仲間に加わりペアで向かい合って「しりとりに足し算」や「じゃんけんポンスクワット」等を行いました。

参加者からは、「学生さんがお相手でも楽しかった」「学生のモデルが大変よかった」「これから毎日足腰を鍛える運動を続けて1年後の自分が楽しみだ」等の感想をいただきました。また参加学生からは、「初めて人前でストレッチの指導をして大変勉強になった」「高齢者とのコミュニケーションではゆっくり話すなど留意が必要なおことが分かった」「楽しい運動の実際を学べた」等の感想がありました。

松本地域ヘルスマイト研修会で 運動指導

7月12日、松本合同庁舎で、松本地域で活躍する食生活改善推進員(ヘルスマイト)のリーダー育成研修会が行われました。松本保健福祉事務所からの依頼により、ヘルスマイトが地域で効果的に活動や指導をするための介護予防運動の基礎的知識の指導を行いました。要介護の主な原因は脳卒中、ロコモティブシンドローム、認知症といわれているため、これらの予防に運動が重要なこととお話し、基本の2つの運動(片足立ちとイススクワット)と家事をしながらできる予防のための運動を指導しました。

参加者からは、「楽しく続けられる運動が大切だ」「日常の生活動作の中で実行できる簡単なエクササイズを学ぶことができよかった」「地域に戻って広めたい」等の感想をいただきました。

皆さまのお近くで、学生や専門スタッフ(管理栄養士・健康運動指導士)が
お手伝いできることがありましたら、是非お声をかけてください。



話と和と輪、想像と創造の空間 地域づくり考房『ゆめ』



地域づくり考房『ゆめ』は、学生が大学での学びを活かして地域と連携し、地域の課題解決に向けて主体的に取り組む活動を支援しています。

「すすき川花火大会プロジェクト」 学生の活躍に共感広がる



8月10日、松本市の筑摩神社の例大祭の夜「すすき川花火大会」が行われました。その実行委員会に参加した松本大学、松商短期大学の学生23名が盛り上げ役と裏方の両面で社会人とともに活躍しました。

新聞取材に「われわれには考えつかないアイデアがいっぱい」と実行委員長(富士電機松本工場長)にたたえられた学生たちは、ポスターデザインの一斉、ラジオCM制作、オープニングイベントの新設など、慣例にとられないアイデアを町会長・市・商工会・企業からなる実行委員会でプレゼンし承認をとりつけました。実行委員会へと向かう車中では、提案する言い回しを繰り返し練習する学生の緊張が伝わり、胸が熱くなりました。その後彼らは担当毎に、クライアントである企業、メディア、花火師らと打合せと交渉を重ねてアイデアの実行へとこぎつけました。なかで

も恒例となった写真・絵画コンテストに中学・高校生部門を新設し、さらに、若者層への関心を広げようと市内高校を訪ねて先生を通じて写真部や美術部への協力を依頼した企画力と行動力には、社会人は脱帽でした。

学生の動きが新聞4紙で「薄川の花火若い力でPR(市民タイムス)」など8回報道されるなど、市民にもアピールできました。若者の想いが多くの方々の心を動かした花火大会でした。

(地域づくり考房『ゆめ』課長 臼井 健司)



「ええじゃん栄村」 今年度初のフィールドワーク

6月30日・7月1日、「ええじゃん栄村」プロジェクトの学生7人が、今年度初となるフィールドワークを実施しました。

「ええじゃん栄村」とは、2011年3月12日に発生した長野県北部地震で被災した下水内郡栄村への復興支援を目的に発足したプロジェクトです。これまでの活動では、栄村産農作物の直売所運営を通じた募金活動や観光マップの作成、村の特産品を用いたメニュー開発などに取り組んできました。

今回のフィールドワークでは、事前に栄村

役場、栄村社会福祉協議会(以下「栄村社協」)の担当者と打合せを行い、60年以上前から栄村内一部地区の水源として重宝されている野々海池ののみの水源確保を祈願して執り行われる神事「野々海開き」に参加させて頂く予定でした。残念ながら当日は激しい雨に見舞われ、神事への参列は叶いませんでしたが、栄村社協の方々より復興状況や「野々海開き」の由来について教えていただいた後、



野々海開きの宴席へ参加させていただきました。根曲がり竹を使用した郷土料理“たけのこ汁”などの振る舞いをいただきながら、学生たちがそれぞれに村民の皆様から「野々海開き」開催に向けた思いや、復興支援に対する意見などを伺うことができました。

その後行った総括では、学生全員から今後に向けて取り組みたい活動案が出され、引き続き栄村社協の皆様と連携を取りながら、栄村の活性化に向けて継続的な支援活動を行っていくこととなりました。今後も地元住民の方との、交流をベースとした学生たちの積極的な取り組みに期待しています。

(地域づくり考房『ゆめ』職員 上川 由香里)

新村地区の「ワンバウンドふらば～るバレー」に参加し、地域のみなさんと交流しました

7月2日、毎年恒例の新村地区オープン大会「ワンバウンドふらば～るバレー」が芝沢体育館で開催されました。松本大学生も参加可能となっているため、地域づくり考房『ゆめ』から3チーム出場しました。「ワンバウンドふらば～るバレー」とは変形したボールを使うバレーボール型のスポーツです。相手コートから返ったボールは必ずワンバウンドさせてからレシーブをしなければならぬルールで、誰でもみんなが楽

しめるニュースポーツです。

新村地区のみ

なさんは日頃からこの競技に慣れ親しんでおり、学生は初参加してから2年連続で1勝もできず予選敗退でした。今年は優勝を目指し練習を重ね、さらに昨年まで参加していた卒業生もメンバーに加わり大会に臨みましました。しかし、結果は今年も3チーム全て予選敗退。競技の楽しさと、地域住民との交流の楽しさ、そして予選敗退の悔しさから、学生は来年もチャレンジしてくれると思います。

老若男女問わず、学生と地域住民の方が



一緒に競える「ワンバウンドふらば～るバレー」は、レクリエーション性と競技性のバランスが良いスポーツだと思います。

スポーツを通して学生と地域住民の方が楽しく過ごすことができ、新しい絆も生まれました。これからも、その他の地域行事に学生が参加することがあると思いますので、地域のみなさま、よろしく願いいたします。

(地域づくり考房『ゆめ』運営委員長 廣瀬 豊)

「フラ・イズ・アロハ」今年も開催

～東日本大震災災害支援プロジェクトに賛同したフラの愛好家たち集う～

第7回フラ・イズ・アロハハワイアンフェスティバルを9月9日に松本大学第一体育館で開催しました。本学では、教職員と学生の有志による東日本大震災災害支援プロジェクトの活動を継続しており、この活動資金の一助となるように企画・開催しています。

今回、ハワイから招聘したのはフラを学ぶ人なら知らない人はいないといわれるロバート・カジメロ氏。そして司会是我的知人でもある元ニュース



キャスターの露木茂氏にお願いしました。

活動資金捻出の為だけではなく、フラを学ぶ人に「本物のハワイアン音楽を聴いていただくこと」「発表の場を提供すること」にも配慮しました。さらに学生たちは、イベントプロデュースの実習もできました。

一つのイベントが多くの効果をもたらしてくれることを今後も期待します。ご協力いただいた関係者に感謝いたします。

(観光ホスピタリティ学科 山根 宏文)



アルクマ揚げそば発売

当研究室で取り組む6次産業推進事業において、新商品である「信州アルクマ揚げそば」を7月1日に発売する運びとなりました。

このシリーズは、当研究室で開発した「焙煎そば粉EX」を活用した商品ラインナップを観光市場に導入することが目的で開発しており、アルクマシリーズ第4弾となる本商品は、JR東



日本が主催する信州デザインセッションキャンペーンに合わせての発売となりました。信州を訪れていた観光客の旅の思い出に、帰りの電車や新幹線の中で缶ビールと一緒に食べていただくことをコンセプトとした商品で、今回は、加工事業者として新たにポンちゃんラーメンで有名な株式会社信陽食品が新たに加わり、以前発表した松本大学6次産業活性化モデルをさらに強固なものとなりました。今後もこの取り組みを継続し、観光業の発展、そして本学の卒業生の雇用の創出に向け、努力したいと思います。

(健康栄養学科 専任講師 矢内 和博)

松本警察署協議会に本学学生が参加

地域社会と警察をつなぐ組織として警察署協議会があります。2000年に成立した改正警察法によって設置されました。21世紀の地域社会の中で警察の運営に民意を反応させるための存在です。長野県警察も県下22警察署のすべてに警察署協議会を設置しています。警察署協議会の委員は各警察署管内の住民です。委員は長野県公安委員会から委嘱を受けて、警察署長の諮問に対して会議を開き住民代表として意見等を提出します。

松本警察署の協議会にはこれまで、本学から私が委員(副会長)として参

加していましたが、任期満了のために後任を探すことになりました。若者の声を協議会に反映させたいという要望もいただきました。そこで本学総合経営学部総合経営学科4年の百瀬友美さんに白羽の矢が立ち、本年6月より、松本警察署協議会委員に委嘱されました。松本の地域社会の中で警察のあり方や政策について、各地区自治会、防犯協会、企業などで活躍している委員の皆さんと共に考えて協議会の活動に参加しています。その活動を経験することで、百瀬さんもさらに成長してくれると期待しています。

(観光ホスピタリティ学科 准教授 眞次 宏典)

「第18回『開かれた学校づくり』全国交流集会in松本」開催

9月17日・18日、松本大学8号館を会場として、全国の高校生・学生・保護者・住民・教員・研究者が、生徒参加の学校づくりや地域づくりの実践や研究をもちより交流する「開かれた学校づくり全国交流集会in松本」を開催しました。折しも台風18号の通過と重なり、参加者の減少が懸念されましたが、開いてみると参加者は北海道から沖縄まで約200名ありまし



た。17日は全体会として松本深志高校生徒、飯田高校卒業生などの報告と議論があり、18日は「生徒参加の学校づくりと主権者教育」「生徒参加の地域づくりと学校」「開かれた学校づくりの研究交流」の三分科会に分かれ、交流しました。本集会への社会的な関心が高く、信濃毎日新聞と市民タイムスが18日朝刊でカラー写真入り記事で報じました。

開催にあたり、住吉廣行学長、柴田幸一事務局長をはじめ多数の教職員に多大なるご配慮をたまわりました。心より感謝申し上げます。

(学校教育学科 教授 武者 一弘)

科研費申請にかかわる特別講演会を開催

今年、文部科学省科学研究費(科研費)が50年ぶりに改革され、次年度に向けた申請が9月から始まっています。そこで、久留米大学の児島将康先生による「科研費を必ず獲得できる申請書の作成方法」という講演会を開催しました。先生は、グレリンという食欲ホルモンを世界で初めて発見されたことで有名ですが、科研費の申請書の書き方に



関してもベストセラー著作をお持ちです。科研費改革のポイントや申請書の書き方について、文系の先生も対象に具体例を挙げながらわかりやすく説明していただきました。大学として科研費の採択率をあげたいということ、また、今年度新設された教育学部には、初めて申請書を書く教員もいることから企画した次第です。一人でも多くの教員が科研費を獲得できることを期待しています。

(研究推進委員長 山田 一哉)



2017「まつもと広域ものづくりフェア」本学を会場に開催

松本地域の子どもたちにもものづくりの魅力を伝える「2017まつもと広域ものづくりフェア」が7月15日、16日の2日間、本学を会場に開催され、延べ13,800名の来場者で賑わいました。

通算で18回目、本学が会場となって8年目となる本イベントで毎年好評のものづくり体験コーナーには、本学からも「キッズプログラミング教室」の他6つのコーナーを設け、小中学生を中心とした参加者は様々なものづくりに挑戦し、楽しさや面白さを実感したようです。

この他、地元の高校・企業が有する



最先端技術を使った製品の展示やデモンストレーションが行われ、こちらも大変な盛り上がりを見せていました。

子どもと一緒に楽しむ親の姿も見られ、継続的に取り組みたいイベントです。(管理課長 赤羽 雄次)

女子ソフトボール部

2度目の全国ベスト8も四強の壁は厚く

9月1日～4日、広島県東広島市・呉市を舞台に繰り広げられた文部科学大臣杯第52回全日本大学ソフトボール選手権大会(全日本インカレ)に出場した本学女子ソフトボール部は、1回戦では中国地区の代表美作大学を4-0、2回戦では東京地区代表の日本女子体育大学を4-3で下し、チームとして過去最高タイとなるベスト8へ進出しました。しかし、準々決勝は前年度優勝校でインカレ優勝7回を誇る園田学園女子大学との戦いになり1-8と力の差を見せつけられる結果となり、またしても目標としていた四強入りはなりません。やはり全国大会で四強入りするチームとは、ソフトボールの技術ということだけではなく、チームとしての総合力に差があるというのが現実です。指導者やスタッフといった人的資源の充実やグラウンドなどの環境設備など、多くの課題があるのも事実です。しかしこれからも私たちはソフトボール競技を通して技術の向上とともに人間力を高めるため、更に高い目標を目指したいと思います。陰になり日向になりご支援賜りました多くの皆様に感謝申し上げます、インカレのご報告といたします。ありがとうございました。

(女子ソフトボール部 部長 岩間 英明)



硬式野球部

“徹底力”を強化し8年ぶりの準優勝

硬式野球部は6月に行われた関甲新学生野球連盟新人戦において、2009年以来8年ぶりとなる準優勝という結果を収めました。

春のリーグ戦後に新チームとなり定めたテーマは「徹底する」ということでした。普段の挨拶や掃除、練習や試合での全力疾走・全力発声。とにかく徹底して行う事を心がけ取り組んできました。野球を頑張るのは当たり前、どこの大学も頑張っている。であれば野球以外の当たり前を全力でやろうと。掃除・挨拶、攻守交替を全力で走る、声を全力で出す。野球の戦術や技術の部分は一つもありません。当たり前のことを全力で徹底して行う。その徹底力をつけることで、試合中のあらゆる状況下での対戦相手への対策やチームの作戦、それらを本当の意味で徹底することができる。その徹底力が相手へのプレッシャーとなり、チームの一体感となる。その事を実践し実感できた大会であったと思います。とはいえ結果は準優勝。まだまだ足りない部分があったことを痛感した大会でもありました。足りない部分は補い、いい部分は更に成長させ、秋のリーグ戦に臨みます。(硬式野球部コーチ 清野 友二)

硬式野球部秋季2部リーグ戦日程 ※球場が変更になる場合があります。

節	月	日	曜	対戦相手	開始時間	会場
第2節	9	9	土	茨城大学	12:30	松本大学野球場
		10	日	茨城大学	10:00	
第3節	9	16	土	平成国際大学	12:30	平成国際大学野球場
		17	日	平成国際大学	10:00	
第4節	9	23	土	埼玉大学	12:30	常盤大学野球場
		24	日	埼玉大学	10:00	
第6節	10	7	土	新潟大学	12:00	松本大学野球場
		8	日	新潟大学	9:30	
第7節	10	14	土	常盤大学	12:00	平成国際大学野球場
		15	日	常盤大学	9:30	

※今秋リーグ戦より2戦先勝の勝ち点制が採用されています。詳しくは関甲新学生野球連盟ホームページでご確認ください。

ラート競技部

「ラート」は学生の“わ”を生む ～ラート競技インカレ開催報告～

8月19日、20日の両日、「第13回全日本学生ラート競技選手権大会」が、松本大学第一体育館を会場に開催されました。松本大学新チームは初出場の新入部員も含めそれぞれの力を存分に発揮した大会となりました。13回を迎えた本大会は学生の手で立ち上げられた大会であり、その趣旨は「学生

の、学生による、学生のためのラート競技大会」とうたう独自性をもっています。歴史は浅いながら大会を運営し重ねる中で必然的に学生間の交流と繋がりを生んでおり、競技中は大学の枠を超えた応援が各選手に送られていました。

今期本学会場で大会を迎えるにあたり、

急きょ大会実行委員長の重責を担うこととなった勝野正視君(スポーツ健康学科2年生)は、部長 宮原朱璃さん(健康栄養学科3年)と共に、5カ月ほどの短期集中の準備と大会運営を全うし、会場から賞賛の拍手が贈られました。この体験を忘れることなく、審判・運営補助に駆けつけた卒業生らと共に、「ラートで繋がる“わ”」を地域に展開してくれることを期待しています。

(ラート競技部顧問 犬飼 己紀子)



第13回全日本学生ラート競技選手権大会 成績

規程演技の部

- 団体 総合優勝 筑波大学Aチーム
- 団体 2位 松本大学Aチーム
- 団体 3位 琉球大学

自由演技の部(個人)

- 男子 個人総合
 - 優勝 及川 輝(スポーツ健康学科2年) 跳躍・直転 1位
 - 2位 増島 勇翔(スポーツ健康学科4年) 斜転 1位
- 女子 個人総合
 - 5位 宮原 朱璃(健康栄養学科3年) 直転 3位

陸上競技部

常盤大智君 陸上日本インカレで激走(男子200m)
～桐生祥秀選手(東洋大)と同走～



予選で力走する常盤君(中央)。手前が桐生選手。

9月8日～10日までの3日間、福井市で「第86回日本学生陸上競技対校選手権大会(通称:日本インカレ)」が行われ、「大学日本一」を決めるに相応しい熱戦が繰り広げられました。本学からは常盤大智君(総合経営学科4年)が念願だった男子200mに出場しました。

結果は、最低限の目標であった予選を通過し(7組2着 21秒52)、準決勝に進出。惜しくも決勝進出はなりませんでしたが、その予選のレースでは五輪、世界陸上男子400mリレーメダリストであり、今大会で100m日本人初の9秒台をマークした桐生祥秀選手と同走となり、貴重な経験と共にいい思い出にもなりました。来年4月以降の就職後も、20秒台を目標に競技を続ける予定です。(陸上競技部 顧問 白澤 聖樹)

ウェイトリフティング部

小松幸佑君、愛媛国体へ出場

ウェイトリフティング部では、スポーツ健康学科2年の小松君が活躍しています。昨年は一年生ながら東日本学生新人選手権で優勝、全日本選抜大会ではクリーン&ジャーク種目で優勝しています。今年度もその勢いはとどまることなく県記録を塗り替え、順調に成果を出しています。現在は、10月4日から開催される愛媛国体に照準を合わせ「得意のジャーク種目で入賞する」と意気込んでおります。健闘を期待します。(ウェイトリフティング部コーチ 牛山 成剛)

軟式野球部

全国大会2回戦進出も、惨敗!

8月20日～25日、長野オリンピックスタジアムをメイン会場に、全国から23大学が出場し第40回



全日本大学軟式野球選手権大会が開催されました。本学は、1回戦で熊本県立大学と対戦、再三にわたる逆転のすえサヨナラ勝ちを果たしましたが、2回戦では新潟医療福祉大学に投打で圧倒され、8対0という惨敗に終わりました。今回の全国大会5年連続出場という栄誉と、7回コールド負けという屈辱を忘れず、「捲土重来」、秋の東日本大会に全力で挑みます。応援して下さった皆様に感謝すると共に、今後ともご声援を宜しくお願いいたします。(軟式野球部 部長 等々力 賢治)

男子サッカー部

第45回北信越大学サッカーリーグ 北信越大会
～前期終了時点で2位に～

1部前期 勝敗表

大 学 名	新潟医福大	松本大学	金沢星稜大	新潟経営大	北陸大学	富山大学	新潟大学	信州大学	順位
新潟医福大		4○1	6○2	0△0	5○1	4○0	6○0	4○1	1
松本大学	1●4		3○1	1●3	3○2	2●3	1○0	9○0	2
金沢星稜大	2●6	1●3		3○1	0●4	6○2	4○1	5○0	3
新潟経営大	0△0	3○1	1●3		5○3	1●2	1△1	4○0	4
北陸大学	1●5	2●3	4○0	3●5		1○0	2△2	3○2	5
富山大学	0●4	3○2	2●6	2○1	0●1		2●3	5○3	6
新潟大学	0●6	0●1	1●4	1△1	2△2	3○2		1●4	7
信州大学	1●4	0●9	0●5	0●4	2●3	3●5	4○1		8

※本学は、前期終了時点で2位。後期の成績と合算して最終順位が確定します。1位と2位は、全日本大学サッカー選手権大会(インカレ)の出場権を獲得します。

スキー部

世界選手権と世界ジュニア選手権で合わせて4冠!!

8月29日から9月7日にかけて開催された、2017FISグラススキー世界選手権(於:オーストリア)、及び世界ジュニア選手権(於:イタリア)で、スポーツ健康学科1年の前田知沙樹さんが合わせて4冠(世界選手権はスーパーコンビ、ジュニア選手権は回転と大回転、スーパー大回転)を達成しました。



前田さんは、来年2月に開催される平昌オリンピックへの出場(アルペンスキー)を目指しており、さらなる飛躍が期待されます。(スキー部部長 齊藤 茂)

県内私立短大生の体育大会

松商短期大学部では9月8日の「第23回長野県私立短大体育大会」に出場し、出場したチームは全て入賞するという活躍でした。女子バレーボールと男子バドミントンが優勝、女子バドミントンは準優勝、女子バスケットボールは3位でした。優勝した男子バドミントンは3チームのリーグ戦で全チームが1勝1敗で並んだものの、得失点差で優勝をさらいました。部員不足を埋める未経験者も粘って得点を重ねたのが効きました。女子バレーボールの決勝相手は主管校の清泉女学院短大で、両校の関係者が集まってさながら応援合戦にもなり、フルセットの末に勝利するという感動を呼ぶものでした。資格取得や就職活動で忙しい短大生活の中で、思い出に残る1日になったと思います。(短期大学部 学生委員 川島 均)



教え子との再会は楽しみ

学校教育学科 教授 今泉 博

30年も40年以上も前に小学校で担任した教え子と、再会することが、ときどきあります。

まだ現場にいるときのことでした。夕方学校の教室で仕事をしていると、2人の女性が、なんの連絡もなく、突然ノックして入ってきたのです。見えた瞬間に、SさんとKさんとすぐ分かりました。高学年のときの面影が残っていたからです。子育て最中の立派な母親になっていました。

当時のことについて話が弾みました。「理科の時間に先生が体重を測り、何グラムかの牛乳を飲んだら体重はいくらになるかを話し合い、実験したときのことは、今でもありありと憶えている」といいます。「私は飲み物だから、少な目に出るのではないかと予想したのですが、その重さの

分だけぴったり体重に加工され、人間にも質量保存の法則が成り立つことに驚きました」と生き生きと話してくれました。覚えようとしなくても、感動したことは末永く子どもたちの記憶に残るものだと感じました。

また、私が共同通信の取材を受け、全国30社ほどの新聞記事に載ったときのことでした。法務省に勤め、地方の少年鑑別所で中心的な役割を担って仕事をするようになっていたKさんが、私が載っている記事を見て、北海道で勤務していた大学に、手紙を出してくださいました。手紙には「先日新聞で先生のお名前とお写真を拝見し、とてもなつかしく、ぜひお手紙をと思った次第です。…」とありました。私が担任したのは、Kさ

んが小学校1,2年生のときでした。手紙はさらに続き、「入学式の後、初めて入った教室で読んでいただいた『そらいろのたね』の絵本や、算数の授業…」と、今でもよく覚えているといいます。この手紙がきっかけになり、40年ぶりに再会できたことは、うれしいことでした。今でも交流は続いています。

中には突然電報を送ってきてくれた教え子もいました。開けたらメロディーが流れ出すのです。それには私もびっくり。電文には、「今朝、出勤の電車で、雑誌『アエラ』を読んでいたら、先生の記事が載っていたので感動し、うれしくて電報を送ることにしました」と記されています。電報代がかなり高かったのではないかと恐縮しました。

教え子と再会・語り合うことは楽しみの一つです。教え子たちの健康と活躍を祈るばかりです。

Information

高校生のための公開授業

受験生の皆さんに授業の様子を知り、キャンパスライフを体験していただくために、全学部、全学科で通常授業を公開します。



[日時] 10/9(祝)
9:40~16:40

無料シャトルバス運行 松本駅アルプス口からのみとなります。
行き▶ ①9:00発 ②10:00発 ③11:00発 ④13:00発 ⑤14:00発
帰り▶ ①13:30発 ②15:00発 ③16:00発 ④17:00発 **予約不要**

受験前の疑問を解決 入試相談会 個別相談

[日時] 10/14(土) 大学祭「梓乃森祭」同時開催 11/23(祝)
10:00~15:00 **予約不要**

[開催場所] 松本大学 ※送迎バスは運行しませんので、ご注意ください。

詳しくはホームページでご確認いただくか、入試広報室までお問い合わせください。

www.matsumoto-u.ac.jp ☎0120-507-200

松大生協から
保護者の
皆さまへ

「健康食券」10%プレミアム付 受付中

好評につき、学生のための「健康食券」(生協の購買でも金券として使用可)のお申し込みを10%プレミアム付で受け付けております。初めて購入される方、再購入される方も同様です。

後期学費のご案内に同封させていただきました「松大生協用振込用紙」をご使用いただき、ぜひお申し込みください。
お問い合わせ: TEL.0263-48-7280

第51回松本大学大学祭「梓乃森祭」

[一般公開] 10/14(土) 10/15(日)
10:00~

[テーマ] A New Beginning
—トビラのその先は—

梓乃森祭
特設HP



■ホンマでっか!?TV出演!人気印象評論家
重太みゆき氏 講演会
「今日から実践できる印象UP術」

10月15日(日) 13:30~

※整理券配布 ※自由席 ※セミナー中に使う為、大きめの手鏡をご持参ください。

■信州産のりんごを使用したオリジナルスイーツを提供!

りんごカフェ 10月14日(土) 11:00~15:00/フォレストホール2F

■第8回 松本大学 地域貢献大賞選考会

10月15日(日) 13:00~

■三四郎 お笑いライブ in ウッドデッキ ※入場無料

10月15日(日) 11:30~/ウッドデッキステージ(野外ステージ)

■今年度より新設!教育学部によるゼミ展示

・「Welcome Hey 城」10月15日(日) 10:00~/第2体育館

・「音楽乃森」10月14,15日 両日開催/8号館2階多目的室

■打ち上げ花火 10月15日(日) 19:30~(予定)

※その他 ゼミ発表、各種イベント、模擬店など多彩な催しで皆さまのお越しをお待ちしています。詳しくはHPでご確認ください。

編集後記

さあ、後期が始まりました。1年生は、初めての前期試験とその後の長い夏休みを終えてキャンパスに戻り、本当の意味で大学生になったと実感していることでしょう。また、10月に開催される大学祭「梓乃森祭」の準備も本格化しており、学生の活動はより活発になってきました。

さて、今回の特集は「防災」です。今年の夏は、天候不順やアラート発動など、予想だになかったことが唐突に起きました。松本大学も防災士など地域の防災に関わるひと作りにも力を入れています。少しでも「減災」するためには、住民ひとりひとりが身近でできることを考えて行動していく覚悟も必要だと思われ。 (記・広報委員長 山田 一哉)

